

## 先人の努力が生んだ日本語の素晴らしさ

——<アイウエオ>と<いろは>の発明を中心に——

### ◆山口謡司・大東文化大文学部准教授著『日本語の奇跡』

#### 日本語は世界10大言語の1つ

昨年2012年（平成24年）は、本居宣長の『古事記』誕生1300年の節目に当たった。そこで宣長の業績について全国で様々な行事やシンポジウムが企画されたが、日本語について世界的に言われるのは「漢字があつてひらがながあつて、カタカナと色々あつて、覚えるのが難しい」と言うことである。

その日本語について実は「日本人が創り上げたたぐい希な言葉の世界！」と分析を加えているのは、大東文化大学文学部の山口謡司准教授だ。先生の著書『日本語の奇跡』（新潮新書）は、日本語のルーツを俯瞰した多角的な視点から、日本語に関わる<アイウエオ>と<いろは>誕生の数奇な軌跡を紹介している。本書は「国語とは国家なり」の思いを新たにさせる先人の労苦の足跡だ。

同書により日本語誕生の歴史をたどる前に踏まえてもらいたいことがある。日本語を話す人は、日本人だけでも1億2千万人もいる。南米、北米の日系1世・2世、3世、台湾、韓国、旧満州国、南方の委任統治領だった国々の年配者も入れると相当な数になる。海外で日本語を学ぶ若者も確実に増えている。実は人口レベルで見ると、日本語は「世界10大言語の1つ」に入る。

### ◆地球的規模で文化を採り入れた日本語は膠着語のアルタイ語系

さて日本語は漢字、ひらかな、カタカナ、ローマ字と四種類の言葉で表記される。「トイレ」は「お手洗い」「便所」「WC」「化粧室」と言い方は様々だ。難しいという人もいるが「日本人は、世界に類を見ない雑多な表記を使い分けできる優秀な語学的センスを持っている」と山口先生はいう。考え方が大事だ。

また、日本人の語学的センスは実に繊細だ。1人称の多さも「わたし」「わたくし」「俺」「僕」「ボク」「我が輩」「小生」「手前」など多彩だ。「遠近高下の間合いを繊細に表現するところは、世界広しといえども、日本しかない」と山口先生。それだけではない。地名では、京都の先斗町は形状にちなんでポルトガルの「先端」を表す「ポイント」から採る——など、日本は「世界の最先端の知識や技術を古代からずっと受け入れながら自国の文化を創って来た。……背景には様々な文化を受け入れ、咀嚼することを可能にする非常に柔軟な『日本語』という言語環境があった」と山口先生は指摘している。

日本語の起源ははっきりしないが、日本語が様々な書き文字を採り入れられるのは「膠着語」と呼ばれる文法的構造から来ている。「膠着語」はトルコからモンゴル、シルクロードを通して朝鮮半島に至るアルタイ語系に属する。

ヨーロッパ、中近東、インド、中国など文明を作り上げてきた国々の言葉と、トルコ語、モンゴル語、朝鮮語、日本語などの「膠着語」との間に、外国語の利用率を調べると、「膠着語」の文法体系をもった言語は、借用語率が非常に高い。「結果として、文明と文明とをつなぐ架け橋の役割を果たしてきた」からだ。とくに「東の端に位置する日本語は、西から押し寄せるあらゆる言語を吸収し、濾過しながら蓄えていった」。東大寺の正倉院の収蔵品はその象徴である。

#### ◆日本語発達に必要なだった漢字から<ひらがな>や<カタカナ>の誕生

日本語が発達するためには、中国渡来の漢字だけでは十分でなかった。長い時間をかけ漢字から<ひらがな>や<カタカナ>を生み出す必要があった。「漢字という『借り物』を昇華させ、自国の文化を繊細に表現する日本語を生み出したことは、日本人の力量を示すもの」と山口先生は言う。

ところで漢字から生まれた<ひらがな>と<カタカナ>だが、「あいうえお」の平仮名の五十音図ができたのは、戦後の1947年（昭和27年）、文部省著作教科書が発行されたのと同様だ。それ以前は発音しやすい「カタカナ」で、戦前の尋常小学校の教科書はカタカナ書きだ。<ひらがな>は五十音図ができるまでは「いろは歌」と呼ばれたように、情緒的な要素を含む七五調の「いろは」で覚えた。このように日本語は情緒的な「いろは」と「ひらがな」が一組と、発音しやすく学習しやすい「アイウエオ」と「カタカナ」が一組の「両輪」によって支えられてきた」と山口先生は言う。

そして戦後は3年、4年生になるとローマ字表による「A・I・U・E・O」を習い、日本語は子音と母音の組み合わせによって成り立ち、基本的には子音で終わる言葉は無いことをローマ字の五十音図ではっきり教わる。山口先生は「子音と母音の組み合わせが5×10で整然と並ぶ五十音図は、あって当然のもの」と認識されている。しかし、まったく日本語を勉強したことのない人々の目には、なんと理想的で、なんとシステマティックに発音を勉強できる言語であるかと映る」と指摘される。多くの日本人が見過ごしている視点だ。

#### ◆いろは歌の余韻の世界こそが我が国固有の言語文化に不可欠な要素

実はこの五十音図は、インドから中国を経て日本へと仏教が伝播されて生まれたが、「いろは」は不要かという、そうではない。

<色は匂（にほ）へど 散りぬるを 我が世誰ぞ 常ならむ 有為（うゐ）の奥山 今日（けふ）越えて 浅き夢見じ 酔（ゑ）ひもせず>の「いろは歌」。

山口先生は「この無常観漂う『いろは歌』は歌であり、和歌に代表される歌こそが我が国固有の言語文化に不可欠の要素だからである。歌のこうした情緒

は、言葉に書きあらわすことが出来ない余韻のような世界を日本が持っていないければ、作ることも、感じることもできない」とその重要性を指摘する。現代の五十音図はワ行の「ゐ」「ゑ」を抜いているが、もし「いろは歌」で抜いてしまったら意味が通じなくなるという。日本語の発音から考えても重要なのだ。

#### ◆漢字導入で初めて日本語は固有のシステムと情緒を書き表す表記方法を入手

西暦245年、応神天皇の御代16年、朝鮮半島の国・百済（くだら）の王仁（わに）によって『論語』と『千字文』は伝えられた、と『古事記』などに記されているが、これは伝説であって事実ではない。『千字文』は中国六朝の梁の時代、西暦500年頃、武帝が周興嗣（しゅうこうし）に命じて一文字も重複していない千の漢字を使い4字250句を作らせたものだからだ。

従って漢字は、2世紀中ごろの遺品に漢字らしきものが見られ、5世紀中頃までにはかなり伝わっていたと推測される。漢字が導入されて初めて「日本語は固有のシステムと情緒を書きあらわす表記方法を手に入れた」（同書）のだ。

漢字文章を教育したのは中国、朝鮮の帰化人たちだ。その時、漢文の音読は、経を「キョウ」と読む「呉（ご）＝江南」地方の発音だった。「呉音」という。わが国の漢字の読み方の最も古い基層がこれだ。この地を治めていた漢族の梁は、仏教を厚く信仰した国で、漢学の上でも非常に重要な文献がまとめられた。梁の昭明太子により編集された『文選』だ。

古代中国の周代から梁までの優れた「賦（ふ）＝詩」「論文」などあらゆるスタイルの文章をあつめたアンソロジーで、720年に上梓された『日本書紀』作成時の種本といわれた。梁の顧野王により編集された『玉篇』も当時最大の漢字字書で、日本でも律令制度の解説や仏教経典の読解に広く使われたという。

時に応神天皇の皇子、菟道稚郎子（うじのわきいらつこ）は、王仁と阿直岐（あちき）に師事して数年で漢字を自分のものとした。それから130年後、聖徳太子の時代となり、604年に書かれた『十七条憲法』は、日本式漢文の先駆けとなって流布した。『十七条憲法』は、貴族や官僚に対して道徳的な規範を示したもので、儒教と仏教の思想が習合され、『論語』と『千字文』に代表される中国六朝時代の思想を反映し、日本的に咀嚼（そしゃく）された。

それだけではない。奈良時代の末期に『万葉集』の編集に関わった大伴家持は『万葉集』の全体の歌の1割を越す473首を採用された歌人だが、政治家で、笠女郎（かさのいらつめ）と恋のやりとりもするなど言葉遊びを繰り広げた。つまり「漢字を使って、日本人はこの奈良時代までに心の襞をも十分に表し得るような日本語の表現を作りだすことに成功していた」と山口先生は見る。

#### ◆隋代思想家、顔之推が子孫に残した訓戒『顔氏家訓』に始まる言語への考察 「国家とは言葉」の思想は、遣隋使、遣唐使を通して日本にもたらされた

言語に対する深い考察は、隋代の思想家、顔之推（がんしすい）が、子孫に訓戒を残した『顔氏家訓』に始まっている。唐代以降の家訓の基礎となった書物だ。儒教では家を守ることはすなわち国家を安泰に導くための最も重要な要素であるとして、漢代以降これを「孝」という言葉で表した。顔之推はこの「孝」の思想を「家訓」という方法で子孫に示した。特に顔之推の言語に関する思想は、唐代に生きた子孫に、言語を正確に使うという思想を深く教えたという。

山口先生は「隋から唐における、顔氏一族によるこうした言語に対する研究は、唐という大帝国を維持するための礎となったとも言える。国家にとって、言語がいかに重要か。言葉を換えれば、国家とは言葉なのである。やがてこの思想は遣隋使、遣唐使を通して日本にもたらされた」と指摘する。

#### ◆日本語誕生にサンスクリット語、仏教の流れが大きく影響

日本語誕生を考える上で、サンスクリット語、すなわち仏教の流れを抜きにはできない。仏教はシルクロードを経て、紀元1世紀、後漢の時代に中国に伝わった。日本では倭奴国王が光武帝から金印を拝受した頃のことだ。

当時の経典は今のヒンディー語の元になったサンスクリット語で記されていた。サンスクリット語はインド・ヨーロッパ語族と呼ばれる言語域で、ローマ字表記と同じ表音式だが、中国語は単音節の言語だ。「頭子音＋介＋核母音＋韻尾」に分解されるが発音は漢字の表面に現れない。つまり表意式だ。

当時の中国人はサンスクリット語を読めなかったが、後漢が滅び、魏・呉・蜀の三国時代を経て西晋による統一がなされた頃には、仏教は全土に広まり、サンスクリット語の仏典がしだいに漢訳された。手掛けたのは紀元4、5世紀、中国西北にあるタクラマカン砂漠の北部に位置する亀茲（きじ）国に生れた鳩摩羅什（くまらじゅう）や、弟子の慧遠（えおん）らだ。鳩摩羅什は『摩訶般若波羅蜜多経』『妙法蓮華経』などを訳し、慧遠は『大智度論抄』などを翻訳。

仏教史では唐の時代の高僧、玄奘三蔵によって新訳の仏教経典が手がけられたが、日本に輸入されたのは鳩摩羅什らによるこうした「旧訳」の経典だった。鳩摩羅什たちは、サンスクリット語の音にそのまま漢字を当てはめて訳に代えた。万葉仮名も「片思い」を「可多於毛比」と宛字による表記法をとったが、サンスクリット語の漢訳と同じ方法だ。「言語においても、日本人は（中国から）仏教経典を通して、漢語の持つ表意性とサンスクリット語の持つ表音性とを柔軟に使いこなす技術を学び、『日本語による国家』を作る道を歩み始めた」のだ。

#### ◆「反切法」で「漢字を用いた漢字の発音」が表せるようになった

##### 宛字で書かれた万葉仮名は「借訓」と「借音」で成立

中国で漢字を使い漢字の発音を表せたのは、漢字を意味に関係なく宛字として使う「反切法」という読み方を会得したことによる。「東」は「徳紅反」と書いて「t o」と読む。この「反」は「かえし」と日本語では読まれるが、二つ

の漢字の発音の半分ずつを使い、上の字は頭の子音、下の漢字は母音をそれぞれ取り「t + o」で「t o」という「東」の発音を取り出した。

顧野王の漢字字書『玉篇』には、1万6917字が納められたが、すべてこの「反切法」で、漢字を用いた漢字の発音の仕方が示されていて、当時の日本人にとって漢字学習には不可欠の書だった。こうして『万葉集』の万葉仮名は、宛字で書かれ、飛鳥、奈良をまたぐ時代に成立したようだ。

例えば『万葉集』の柿本人麻呂の歌くささのはは みやまもさやに さやげども……>の大意は「笹の葉に風が吹き、山中はざわめきたっているが、私は一途に妻を思うことだよ。まさに別れてきたばかりなのだから」という歌だが、万葉仮名の原文は<小竹之葉者 三山毛清尔 乱友……> (巻2 133)だ。漢字の発音を反切法で調べ、当時の中国語と対応させて歌を再構成すると<つあつあのみあふあ みやまもつあやに つあやげども……>となるという。

当時の中国語では「小竹」は「シアウ・チュック」と発音されたが、日本語にも「小さな竹」を指して「つあつあ」という言い方があったので「小竹」の熟語を借用し「つあつあ」という発音を宛てた。「借訓」と呼ぶ方法だ。

一方、この和歌では「毛」などを日本語の助詞として使用。「毛」は「モウ」と当時の中国語で発音した。宛字だ。中国語の音を借りて日本語の表現を可能にした。「借音」と呼ばれている。こうして万葉仮名は借訓と借音で作られた。

山口先生は「万葉仮名はかくも独創性に満ちたものだった」という。こうして『古事記』『日本書紀』、天皇が出す「詔勅」（日本では宣命という）、神道で唱えられる「祝詞（のりと）」もすべて万葉仮名だ。孝謙天皇が出された757年（天平勝宝9年）の宣命は「天皇我大命良末等宣布大命呼衆聞食倍止宣。」その読み方は「天皇（すめら）が大命（おおみこと）ら宣（の）りたまふ大命を、衆（もろもろ）聞き食（たま）へと宣（の）ぶる」だ。意味は「天皇が、天皇の詔勅として述べられるこの詔旨を、皆が聞いてくれるようにと、述べられる」。天皇、大命など漢語に由来する言葉は大きな字で、「我」、「良末等」など純粋の日本語の部分小さな字でと使い分けする方法が、間もなく誕生する<ひらがな><カタカナ>へと大きな影響を与えて行く。

#### ◆中国文化への傾斜で、平安時代初期には読めなくなった『万葉集』

中国の法律に習い『大宝律令』による国家体制を整えた当時の我が国の課題は、その体制がいかに正当な権威を保持して来たかを中国や他の朝鮮などに示すことで、そのために「正史」の選定を行った。平城京遷都2年後の712年、太安万侶により『古事記』が上撰され、翌713年には、地方の諸国に『風土記』の撰進が命じられた。舎人親王らがまとめて、720年（養老4年）に中国の「正史」に匹敵するものとして『日本書紀』を編纂した。

しかし『万葉集』が編纂されてまもなく、平安時代の10世紀初頭に『古今和歌集』が成立するまで、中国文化への傾斜により伝統が消え「国風暗黒の時

代」となった。結果、平安時代初期には『万葉集』が読めなくなり、村上天皇は源順(みなもとのしたごう)、清原元輔など学者達に『万葉集』解説を命じた。

#### ◆借り物でない世界を実現する力をもたらした遣唐使・空海と最澄

710年に創られた奈良・平城京への遷都により、唐を手本とした律令制度は強化され租庸調の税金や戸籍の新制度が全国的に行われた。これを支えたのが仏教による国家鎮護思想だ。全国に国分寺・国分尼寺が建ち、灌漑・治水も整備され、都には国家鎮護の象徴となる巨大建築物の東大寺が建てられた。

国家事業の多くは、聖徳太子が没してから8年後の630年に始まり、飛鳥、奈良、平安と受け継がれ、平安時代中期の894年(寛平6年)、菅原道真の建議によって終了するまでの264年間、ほぼ20回に渡った遣唐使の手によって国内にもたらされた。その一人に、後に真言宗を創始した空海がいた。

空海は平安時代初期の804年(延暦23年)博多から唐に向った。794年(延暦13年)、桓武天皇により都は奈良から平安京に遷都していた。高僧、恵果(えか)から「胎蔵」「金剛」の秘教を伝授され「早く郷国に帰りて以て国家に奉り、天下に流布して蒼生の福を増やせ」と言われて、2年で帰国した。

「空海が持ち帰ってきたものは、情報より『実』とでもいふべき意識ではなかったか、言ってみれば、借り物ではない世界を実現する力である」と山口先生は述べる。折しも日本では、本当の意味での独創が始まろうとしていた。日本語において、それは<カタカナ>と<ひらがな>へと繋がってゆく。

#### ◆国語による仏教理解を図るためサンスクリット語に取り組んだ空海

806年に唐から帰国した空海は、東大寺第14代別当に迎えられる。東大寺や唐招提寺など奈良仏教の中心的な寺院には、国家鎮護の中核として唐より来朝した偉大なる聖僧、鑑真の足跡が残っている。鑑真の来朝を成し遂げたのは、遣唐使の大先達にあたる奈良の政治家、吉備真備である。空海の生まれた翌年に世を去ったが、その崇高な遺志を空海は受け取っていた。

空海はサンスクリット語の研究を手がけた。真魚(まお)と名乗る無名僧の頃からだ。インドから唐に密教をもたらした高僧、善無畏(ぜんむい)に、サンスクリット語から漢訳された「虚空蔵求聞持法(こくうぞうぐもんじほう)」を授かった時といわれている。意識と音訳が混在する同法を解釈するには、漢字の発音からサンスクリット語を導きだし、本来の意味を知る必要がある。

山口先生は「『祖国とは国語である』という、ルーマニアの思想家、シオランの有名な言葉を引くまでもない。国家が存在するからには『国語』が存在する。そして『国語』は、上からの指針によって創られるのではない。それは国民の生活の中から湧き上って来るものである」という。民衆は「国語」による仏教の理解を望んでいた。仏教経典の原点であるサンスクリット語に返り、本質から日本語による理解を構築してゆくことが必要不可欠だったのだ。

#### ◆膨大な漢典焼失を招いた冷泉院の焼失と遣唐使を廃止した道真の意図

空海の死から40年後、875年（貞観17年）の正月、京都御所から道を隔てて東側にある殿舎、冷泉院（宮内庁書陵部に当る）が焼失した。嵯峨天皇によって漢詩を詠ませる場所として建立され、中国伝来の膨大な蔵書が納められていた。焼失後、藤原佐世（ふじわらのすけよ）によって著された中国書籍の目録『日本国現在書目録』には、漢籍の数、約1万7千巻、実に1579にのぼるタイトルが記されている。遣隋使、遣唐使によってもたらされた重要な典籍が、日本の政治・文化の中心である朝廷の書庫から忽然と姿を消したのだ。

火事から約20年後、重要な事件が起こる。894年（寛平6年）、後に「学問の神様」として崇拜された菅原道真によって決定された遣唐使の廃止だった。道真は中国文化を肌身に感じる環境に育ち、早くから頭角を現し、『類聚国史』や『日本三代実録』などの歴史書を編纂した。道真はわが国を通観し、日本がこれまで唐から学んだものを昇華させる時代に入ったと感じたのではという。

道真が大宰府で没する903年の前後には、日本語にとり重要な書物が現れた。『伊勢物語』が成立し、紀貫之は『古今和歌集』を撰進し、935年（承平5年）には『土佐日記』を表す。「まさしく中国からの影響を脱した日本語の地平線が、ひろがりを見せていたことの表れだった」と山口先生は言う。

#### ◆日本文化昇華の時代に入り、8つから5つに減った母音

ところで、『古事記』『日本書紀』『万葉集』に「上代特殊仮名遣い」というそれ以降の日本語とは大きく異なる複雑な体系があったことを証明したのは、終戦の半年ほど前に亡くなった国語学者、橋本進吉博士だ。橋本博士は、江戸時代の国学者、石塚龍麿の研究をもとに『古事記』『日本書紀』『万葉集』を考証し、有坂秀世博士がこれを推し進めた結果、「キ・ヒ・ミ・ケ・ヘ・メ・コ・ソ・ト・ノ・ヨ・ロ・モ」、また「ア行のエ」と「ヤ行のエ」の14の仮名について、2種類（甲類、乙類）の異なった音が存在したとの結論を得た。

例えば「ゆき（雪）」の「き」は甲類、「つき（月）」の「き」は乙類。万葉仮名も甲類と乙類で文字の混同はなく、発音も甲類の「キ」は「k i」、乙類の「キ」は「k ī」となる。隋の頃の漢字発音体系を反映し、万葉の頃は「i」と「ī」、「e」と「ë」、「o」と「ö」の違いがあり、5母音に加えて8母音だったという。

ところが8つの母音を持つ万葉仮名の音韻体系は、平安時代初期に突如として消失、5つの母音になる。山口先生はこの原因を帰化人説に求めている。『古事記』など古典を編纂したのは8つの音韻が聞き分けられる帰化人だったが、5つの母音で十分な日本人の表記が自立的に行われるようになったと考える。遣唐使廃止で中国文化の流入が止まり、日本文化の昇華の時代に入ったと見る。

#### ◆漢文訓読で漢文を日本語で読む挑戦始まる

## いろは引きで作られた梵漢対訳字書と無常観漂う「いろは歌」の登場

時代は遡るが、大伴家持と同じ参議の藤原浜成が772年(宝亀3年)に『歌経標識』というわが国最初の歌論書を作った。学問といえば、中国の儒教や仏教経典の類だった日本人が和歌の考察を行う時代に入った。中国人と同じ発音で読み、意味を理解してきた漢文を、日本語で読めないか、挑戦も始まる。

日本語で読む技術を可能にしたのが、現在、高校で習う形で今も残っている漢文訓読の方法だ。漢文に返り点の「レ点」などを付して読む方法だ。漢文の一字一字の周囲に朱点を打って読む方法だ。朱点は「ハ」「ニ」などの助詞とともに返り点も示す。「オコト点」と呼ばれるが、これを付したのが「点本」だ。奈良時代にはなく、最古の点本は828年(天長5年)の『成実論』だ。

2年後の830年の年期が記された『金光明最勝王経』には、奈良の西大寺で読まれたことを示す「ヲコト点」がついている。

西大寺では、1079年(承暦3年)に注釈書『金光明最勝王経音義』が書写されたが、ここに10世紀に成立したと思われる「いろは歌」と五十音図の原型が登場する。平安後期、新義真言宗の祖、覚鑿(かくばん)は「いろは歌」を注釈し、これは『涅槃経』の無常偈で、意味は「すべてのものは無常。生じては滅びる性質のものである。この生と滅とを滅し終わって、生なく滅ないものを寂滅といい、これがすなわち楽、涅槃である」と解説した。

そして、わが国の辞書史に大きな業績を残した岡田希雄は「いろは歌」の作成は10世紀前半、927年以前に遡ると分析した。菅原道真の娘を妻とした宇多天皇の御子・斉世(ときよ)親王が作った『梵漢相对抄』(50巻に及ぶサンスクリット語と漢語の対訳字書)が、<いろは>引きで作られていたのだ。

### ◆漢字を略して生れた「カタカナ」、漢字の草書体から生まれた「ひらがな」 和歌が日本語の語彙を発達させる原動力となった

また、<ひらがな><カタカナ>のどちらにも「仮名」という言葉がつくが、この字は日本語が誕生してくる思想的背景を非常に凝縮して示している。「名は以て体を表す」(『源氏家訓』)という古諺(こげん)がある。名を付けることにより「実体」を手にする。漢字は奈良時代以来、別名「真名」と呼ばれた、とすれば「仮名」は「真」を捨て去った「見せかけの名前」になるが。

そこで日本人は、何とか自分たちが話した通りに書けないものか。様々に試行錯誤を重ね、漢字の形を略し、発音記号を作ろうとするより他なかったものと見える。例えば、菩薩の字に「ササ」と書いたり、「灌頂」「斗丁」と書いたりする。日本語で「ア」と書くために「阿」が利用され、この「𠂔」の部分抽出して「ア」という記号へ返還させる方法が可能であることを帰化人は示してくれたのかもしれない。これが「片仮名」と呼ばれる大きな理由だろう。

これに対して<ひらがな>は漢字の草書体を利用して成立した方法であり、もとは「草仮名」と呼ばれていた。「ひらがな」の呼称が起こったのは江戸時代からだ。<ひらがな>が成立するのは、平安初期から中期以後。和歌、日記、物語など、日本独自の文化を形成していく女性たちに浸透する。また、和歌は基本的に漢語を利用せず「大和言葉＝和語」を使って作られるもので、これが日本語の語彙を発達させる大きな原動力となった。

こうして<カタカナ>、<ひらがな>が、新しい我が国独自の文字となっていった。漢字の意味や発音を捨て去った「見せかけ」の部分を使うからこそ、我が国独自の文字は「仮名」と呼ばれることになった。

#### ◆明覚、加賀で五十音図の基礎築く、子音と母音で日本語音韻体系の成立説く

西大寺の『金光明最勝王経音義』に「いろは歌」と五十音図の原型が掲載された。「5音」としては、「ラレロルリ ナネノヌニ……」が、「五音は又この様にも記される」として「ラリルレロ ワキフエヲ…」と挙げられている。さらなる原型は11世紀初めの醍醐寺蔵の『孔雀経音義』だが、40音しかない。

今日と同じ「五十音」の順列は江戸時代に確立されたが、子音と母音の組み合わせで日本語の音韻体系が成り立っていると「五十音の図」として説明し、今日の五十音の基礎を築いたのは平安時代中期、加賀・薬王院温泉寺の天台宗の僧、明覚だ。空海は帰国後、日本の言語学史上偉大な業績の一つとされる日本で初めての梵和辞典『梵字悉曇字母并釈義』を編纂したが、明覚が悉曇学の研究に没頭したのは、日本語がそれまでの表記ではうまく書きあわせない状態に突入していたからに他ならず、日本語による仏教の理解に向けられていた。

#### ◆話し言葉と書き言葉の乖離 明覚、『反音作法』で五十音の配列図示す

平安時代中期、日本語は、話し言葉と書き言葉の乖離によってすでに混乱が起きた。例えば「故」が「ゆゑ」と書かれたものが、「ゆえ」と書かれたりした。言葉の揺れが何故起こったのか。悉曇学で漢語の仕組みがわかったように、日本語も何か発音の仕組みがあるのではないか。明覚は『梵字形音義』の中で、梵字を知らなくては仏説を本当に理解することができないと述べ、梵字や漢語の音を知る上においても日本の<かな>の優位性を説いた。

彼はその<かな>を知るために『反音作法』という書物を表し、五十音の配列図を示した。<アイウエオ カキクケコ ヤイユエヨ サシスセソ…>。彼は初めのアイウエオの5字はすべての文字に通用する音の響きだ。アはハカヤサなどの響きであり…一般の人々はこの5つの響きを知らないために多くの誤りを犯しているとして、それを証明するために更なる説明を加えた。

<カ(クア) キ(クイ) ク(クウ) ケ(クエ・キエ) コ(クオ) サ(スア) ……>。カッコ内の音を示したのは、日本語とサンスクリット語に共

通した「連声（れんじょう）」に関係があるからだ。言葉の末尾の音によって後の音が変わる現象だ。「いんえん（因縁）」が「いんねん」となる現象だ。

日本語が急激な変化を遂げると同時に、人々は「連声」のような日本語独特の音の変化によって乱れた発音をするようになった。こうした日本語の揺れがもっとも大きいというねりとなったものが芸能に見られる言語であるが、芸能とはもともと学問をいい、芸能活動から能や狂言も生まれ、室町期の日本語を形成していく原動力となった。

#### ◆言葉を統括した天皇、八大和歌集は歌言葉を整理したか 歌学について「仮名遣い」を整理しようとした藤原定家

勅撰集の『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』を「三大集」、これに続く『後拾遺和歌集』『金葉和歌集』『詞歌和歌集』『千載和歌集』『新古今和歌集』までを含めて「八大和歌集」という。『古今和歌集』の成立は平安京遷都から数えておよそ110年後に当たる905年（延喜5年）。『新古今和歌集』は鎌倉幕府が成立して間もない1205年（元久2年）。この間300年、約30年から40年のスパンで次々に勅撰集が作られたのは何故か。考えられるのは、歌を集めながら歌の言葉について整理をしようとしたのではないかということだ。

日本語の方言についても、1150年（久安6年）頃に書かれたと考えられる藤原清輔の『奥義抄』に記されている。藤原範兼（のりかね）の『和歌童蒙集』という歌学書には、歌の分析をしながら、明覚と同じように日本語の音韻について述べている部分が多い。明覚の日本語への考察は歌学者にも及んだ。

そうした中で歌学について「仮名遣い」を整理しようとしたのが藤原定家という一人の天才だ。『古今和歌集』を20回も筆写した定家にとって、その「序」は読むたびに、和歌の源流を思い起こさせたに違いない。「やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」で始まり「たとひ時うつり事さり、たのしびかなしびゆきかふとも、この歌の文字あるおや」という序文は、神代の時代から説き始めて『古今和歌集』編纂までの日本語の厚みを描き出す。

そうした言葉を統括しているのは誰かという、それは天皇だ。天皇の命によって、和歌の専門家が数千数万の歌の中から特に優れた歌を選びすぎる。勅撰集に入る、また入る数によってその歌人の評価が高まり、同時にこうして選ばれた言葉が天皇の言葉を作ることになる。

#### ◆濁音、拗音排除の「いろは歌」は解釈の揺れも容認する日本語の中核

ところで平安時代末期には、言葉の変化が起こっている。「冷泉」が「れいぜん」と読まれたのが「れいぜい」と読まれ始めた。〈ひらがな〉で書かれてしまうと分からなくなる所がある。意味が解るためには書き方の規範が必要だ。

しかし、和歌は揺れる解釈をも含めて和歌である。そういう共通認識があったと考えられる。また、中国の古典には句読点が無い。『論語』も仏経典も一切句読点がない。なんとでも解釈できるところが多くある。

和歌が言葉の揺れを認めることは、まさに訓練によってしか解釈されない世界があることの証だ。その訓練の中心を支えたものこそ、天皇であり、天皇が勅命で作らせる勅撰和歌集だった。濁音、拗音（ようおん）などを排除している「いろは歌」は、解釈の揺れをも容認する日本語の最も中枢を示すものだ。

奈良時代、律令体制が整った後、漢文によって文書を書く機関として全国に国学が置かれたのは、中央集権化の体制を維持する為だったが、伝統とは別に和歌があり、中央集権の最も核心のところに置かれ、日本の文化の根元をなした。鎌倉に幕府が開かれると、三代将軍源実朝を始め多くの武士も和歌を習い始める。京都の言葉と各地の方言が入り乱れたが、基本的には、和歌は京都の言葉でつくらなければならない。「雅言」とは、都の言葉なのである。

定家の後、日本語はさらに発音に大きな変化が起こり、「え、ゑ、へ」、「ひ、い、ゐ」の区別がなくなり、江戸時代には「ぢ」と「じ」、「づ」と「ず」の区別も無くなってしまう。言葉は変化するものだが、「言語の経済化」とも言われるように、複雑な発音は簡単になろうとするのが常だった。

どのように書くのが正しいのかという問いは、定家以降も続けられる。定家は和歌の言葉の揺れを『僻案』に書きつつ『源氏物語』の校訂にも力を注いでいる。鎌倉時代には21種の写本があったとされるが、それらの本文を比較し、現在、「青表紙本」と呼ばれる『源氏物語』を作りだした。

#### ◆室町期日本無双の才人・一条兼良、仮名遣い・五十音配列の研究を深める

そして、1356年（正平11年・延文元年）に『菟玖波（つくば）集』などを編集して連歌の大成者と呼ばれる二条良基によって、五十音図は初めて今日と同じような「アカサタナハマヤラワ」という形で偶然、並べられた。

しかし、現在のような五十音図が完成するのは江戸時代だが、その前の室町時代に「日本無双の才人」と評された人がいた。二条良基の孫、一条兼良である。「応仁の乱」の時代の人だ。学問の幅が広く、有職故実や和歌、連歌、能楽に詳しく、神道や仏教、朱子学などにも影響を受け「三経一致」を説いた。『仮名遣近道』を著し、動詞、形容詞などの活用について見解を示し、五十音の図に従った「行」という考え方を現した。一歩進歩したのである。

俗事を嫌って山里に籠り、『万葉集』や『源氏物語』の研究をした江戸前期の国学者、契沖の『和字正濫鈔（わじしょうらんしょう）』は、こうした立場に連なる形で、動詞や形容詞の活用などを含めて古典の仮名遣いを研究した。やがて、後に続く賀茂真淵、本居宣長によってより詳細な日本語の研究が進んでいくのである。

#### ◆日本精神史の核掘り起こした本居宣長の『古事記伝』『源氏物語玉の小串』

ところで、明覚の「アカヤサタナラハマワ」は、悉曇学の言語学の方法「三内（さんない）」によって並べられた。「三内」とは、発音の際の調音の位置を表すもので「カヤ」を喉音、「サタ」を歯音、「ナラ」を舌音、「ハマワ」を唇音として分類している。しかし、現代のような母音が縦に5つ並び、横に<アカサタナ>と綺麗な五十音図になるためには、「オ」と「ワ」を、「ワ」は母音なのか、どちらが「w o」で、どちらが「o」か。ア行とワ行のどちらに置くのが正しいのか、という問題を解決しなければならなかった。

これを解決したのが、江戸時代の国学者、富士谷成彰と本居宣長だった。二人は同時期に、この問題にそれぞれ別な方法を見つけてピリオドを打った。宣長は、古語では、「面（おも）」の「も」、「石（いし）」の「し」のように、しばしば語頭の「あ、い、う、お」の音は省略されるが、こうしたことはワ行の音では決して起こらない。さらに字余りの句を読む場合、句の調子がさほど読みにくく感じられないのは、ア行の音の場合に限ること。日本語の表記で表す時には必ず<アイウエオ>と書いてワ行の音を使わないことを明らかにした。

「お」と「を」の区別を論じたこの宣長の説は、著名な国語学者、山田孝雄（よしお）によれば、「国語学史上の一大発見」とさえ言われている。

宣長の研究方法は、可能な限り『古事記』の伝本を集め、それを校合して、中から最も信頼すべき本を底本として選び、諸本を参考にしながら本文を訂正していく方法だ。本文が何故正しく書き写されなかったのか、どう読めば正しく解読できるのかを知るためには、仮説を立てながらひたすら本とにらめっこするしかない。35年間に及ぶ彼の渾身の作業の成果が『古事記伝』である。

その間に源氏物語の注釈書『源氏物語玉の小櫛』を同様の方法で著した。この二書により、彼は日本の精神史の核を掘り起こした。彼が焦点を当てたのは、「我々日本人はどこから来たのか。どこにその源を求めることができるのか」（同）ということだ。こうして彼が見つけたものが「もののあわれ」だ。

「言葉」は記号である。言葉を研究すれば、日本と云う古代から連なる精神をも見通すことができるのではないかと宣長は考えたに違いない。中国からの影響を受けて作られた国であったとしても、その心は残っている。『古事記伝』の中で宣長は「鳥獣、草木、海山などの類、何にまえ尋常ならずすぐれたる徳のありて可畏（かしこ）き物を迦微（かみ）とは言うなり」という。

神道とは自然と人間と神が互いに深くつながっていると彼は考えた。

#### ◆五十音配列の辞書『言海』を編んだ大槻文彦

五十音配列の<アイウエオ>を小学校入学とともに頭に叩き込むのは、文章読解と解らない言葉を辞書で引けるようにするためだが、国語辞書が本格的に五十音配列になったのは1889年~1891年（明治22~24年）、文部省日本語辞書編纂局に務めた国学者、大槻文彦の『言海』全4巻ができてからだ。

それまで一般に使われた辞書は百科辞典式に「天地門」「人倫門」など部門別に分け、その中にランダムに言葉を置いた『下学集』や、「いろは順」に語彙を並べた『節用集』という室町期に創られた辞書だった。『言海』出版直前でも物集高見（もずめたかみ）の『ことばのはやし』など<いろは順>が主流だった。

「独り取り残された思いを感じながらも大槻が、国語辞書編纂に対する考察と工夫に揺るぎ無い自信を持ったことは『言海』の序文に漲（みなぎ）っている」と山口先生はいう。それは1つには辞書には必ず「発音」「名詞、動詞、形容詞などの品詞の別」「語源」「語釈」「出典」がなければならず、それを完備したこと。2つには、平安時代以来これまでの我が国の辞書は、漢和、もしくは和漢対訳の辞書であって、純粋な意味の日本語の辞書ではなかった。日本語辞書は日本語を日本語で解釈する字書でなければならないことを実現したこと。3つには、辞書は文法の規定による作成を実現したことだ。

大槻が自負するところだ。1890年11月、学校で文法を教えるための教科書が必要だとの要望に答えて、大槻は文法上の原則本『語法指南』を出版。同時に4冊目の巻頭に同書を収めた。文法を無視して語釈を施すだけでは「辞書」ではないというのは、祖父、大槻玄沢の影響であった。

『語法指南』は、巻頭に<ひらがな>と<カタカナ>で五十音を示し、「お」と「を」、「い」と「ゐ」、「え」と「ゑ」の発音が口内の調音の場所が違うこと、また、濁音、半濁音の別があることを丁寧に示した。また、名詞に普通名詞と固有名詞があることを述べた後に、動詞の変化を分類した。五十音図は、日本語の動詞の変化を理解するために不可欠なシステム、道具と確認されたのだ。

#### ◆文化を吸収し新たな世界を創成する曼荼羅的世界を有す日本語の素晴らしさ

しかし、便不便とは別に、大槻の心底には言葉に表せない、大きな日本語の歴史の重みと、明治という近代国家を創成していく新しい精神が流れていた。

1868年（慶応4年）4月6日に「五箇条の御誓文」が布告された。

御誓文の漢字の書き方は、奈良時代に書かれた正倉院にある、中国六朝風の書体で書かれた写経文書にそっくりだ。小さなカタカナで送り仮名が付けられている。書き方としては奈良時代の宣命（詔勅）の形に倣ったものだ。我が国の国家の曙との比較からしても、明治維新が国家としての日本の確立を目指すという点で、同質の精神にあったのではないだろうか。

一方、<いろは>は情緒の世界のものだ。<アイウエオ>という<カタカナ>は、大槻文彦が日本語文法の明に的確だと認識したものだ。また役人が漢文体を使って公式文書を書くシステムの世界を構築するものだ。明治という時代は、情緒よりシステムの構築を必要とした時代だった。大槻が『言海』に用いた「あいうえお順」の配列は、こうした明治の風を受けることによって得た、システムとしての日本語という認識ではなかったかと考える。そして<アイウ

エオ>は、大槻文彦の『言海』の配列に採用され、文部省発行の教科書編纂趣意書に書かれたように、日本人が初めて習うべきものへと成長した。

ところで、お寺の仁王像は怒りの表情で口を開けた「阿形像」と、口を「へ」の字にして内面に怒りを秘めた「吽(うん)形像」の二体で構成されるが、「阿」は宇宙の全てを生じる「種」を象徴し、「吽」は「宇宙の終息」を意味する。また、空海の手書『吽字義』によれば、「吽」はサンスクリット語で「h」「u」「n」の音が合体したもので、「阿」字があらわす初元の本体と同一だとする。つまり「あ」から始まり「ん」で終わる日本語の辞書は、宇宙の元始から始まる無限の存在を生じ、いつか収束して再び芽となって新たな世界を創成する曼荼羅の世界観に基づいているといえる、と山口先生は指摘する。

山口先生は日本語について「<いろは>と<アイウエオ>の両輪によって情緒と論理のバランスを取ることができるこのような仕組みの言語は、日本語以外にはないだろう。あらゆる文化を吸収して新たな世界を創成するという点で、それは曼荼羅のようなものと言えるかもしれない。我々はそうした素晴らしい日本語の世界に生きている」と同書を結んでいる。深い感慨を催す指摘だ。